

銭形平次捕物控

身投げする女

野村胡堂

青空文庫

一

ガラツ八の八五郎は、こんないい心持になつたことはありません。

親分の銭形平次の名代^{みようだい}で、東両国の伊勢辰^{いせたつ}でたらふく飲んだ参会の帰り途、左手に折詰をブラ下げて、右手の爪楊枝^{つまようじ}で高々と齒をせせりながら、鼻唄か何か唄いながら、両国橋へ差しかつて来たのは真夜中近い刻限でした。

借着ながら羽織を引っかけて、懷中^{ふところ}には羅紗^{ラシャ}の大紙入、これには親分の平次が、人中で恥を掻いちゃ——と一分二朱を入れて

くれたのですから、自分の身しんしょう上、六十八文と合せて、八五郎
すっかりいい心持になったのも無理のないことです。

折柄の月夜、亥刻よつ（十時）を過ぎると、橋の上もさすがに人足
が絶えます。

「おや？」

ガラッ八は立止まりました。ツイ眼の前へ、人魂のようにフラ
フラと行くのは、後ろ姿ながら若くて美しそうな娘、何やら思案
に暮れる様子で、深々と顎あごを埋め、襟えりの掛った秩父絹ちぢぶぎぬの袷あわせ、塩
垂れてはいるが、赤い可愛らしい帯、すらりと裾すそを引いて、草履
の足音も、ホトホトと力がありません。

娘はガラッ八の跟ついて来るのに気が付かなかったものか、よろ

けるように欄干らんかんに凭もたれると、初冬の月を斜めに受けて、鉛色に

淀んだ川の水を、ジイツと魅入みいられるように眺め入りました。

後おくれ毛を搔げき上げるか弱い手、ホツと溜息を吐つく様子までが、

躑あしおと音を忍しのばせたガラツ八には、手に取るごとく見えるのです。

娘はしばらく涙に暮れる様子でした。が、フト、後ろからガラ

ツ八の近づくのに気が付くと、草履を脱いで、その上に何やら紙か

片みきれを置き、簪かんざしを錘おもりにして、

「南無——」

欄干へ攀よじ登ったのです。

「危ないッ、待った」

後ろから飛付いたガラツ八、危うく欄干を越しそうにした娘の

身体をもぎ離すと、それを抱き上げたまま、力余つて後ろざまに
よろけます。

「あれーッ、放して下さい」

必死ともがく娘。

「とんでもねえ、放したらまた飛込むだろう。どんなわけがある
か知らねえが、死ぬのは不^{ふり}料^{よう}簡^{けん}——」

「いえいえ死ななきやならないわけがある、お願いだから放して
下さい」

華^き奢^{やし}で骨細な娘ですが、必死の力を出すと、腕自慢のガラッ

八にも容易には押え切れません。後ろから羽交締め、欄干へ寄
せないのが精一杯。

「死んで花実が咲くものか、——第一この寒空、死にようもあるのに、身投げは季節しゆんじゃねえ、——落着いて訳を話せ」

「お願いだから殺して下さい、どうせ生きてはいられない私」

身を揉もむほどに、娘の身体がしっとり汗ばんで、薫くんじよう蒸しょうされ

た脂粉しふんの匂いが、揉み合うガラツ八をふんわりと押し包みます。

「どんなわけがあるにしても、こうなつては見殺しには出来ない、

——俺も男の端くれだ、及ばずながら相談にも乗ってやろう、ま
ず訳を話せ」

「……………」

「親も兄弟もあるだろう、後に残る者の歎きも考えてみるがいい」

「……………」

娘は次第に気が落着いたものか争うのを思い止まると、ガラツ
八の胸に顔を埋めて、シクシクと泣き始めました。思い詰めた興
奮が去ると、急に悲しみが蘇よみがえったのでしよう。

「一体、何が何で死ぬ気になったんだ、話してみるがいい」

「……………」

「色恋の沙汰か」

「……………」

娘は激しく頭を振りしました。

「それとも、よくある話だ、主人の金を落したとか、盗まれたと
か———それでもない？」

「……………」

「じゃ、若い娘が死ぬほどのわけがないじゃないか、一体どうしたというのだ」

ガラツ八の手はいつの間にやら、娘の背を撫なでて、その泣き濡ぬれた顔を覗いております。

「——叔母さんが、身売りをしろって言うんです」

「何？ 叔母さんが、身売れって？——そんな馬鹿なことがあるものか、親の承知しない者を、叔母が何と言ったって——」

「でも、私は親がない子で、叔父さん叔母さんに藁わらのうちから育てられました。この暮のくり廻しが付かないから、吉原へ身売れと言われると、いやとは申されません」

「……………」

「どうぞ殺して下さい。生きていても望みのない身体、小さい時死に別れた、ほんと真実の両親のところへ行くのが、せめてもの望みでございます」

顔を挙げた娘、涙はもう乾いておりますが、月の光に洗われたようで、その美しさというものはありません。せいぜい十八九にもなるでしょうか、言いようもなく哀れ深い姿です。

「とんでもねえ、身売りがいやだから死ぬというのは、若い者には無理のないことだが、どうせ金で済むことなら、何とか話し合っても付くだろう。ほんの少しばかりだが、これだけでも、持つて行くがいい」

ガラツハは懷中から羅紗の大紙入を出すと、その中から一分二

朱と六十八文の全財産を懷紙に捻^{ひね}つて、娘の懷中に押し込みました。

「でも、私の身の代金は、年一杯で手取り三十五両と、女衞^{ぜげん}が決めて行きました」

娘は少し困った顔を挙げます。

「なるほど、三十五両と一分二朱六十八文じゃ少し違いすぎる、

——こうしようじゃないか、俺がこれから叔父さん叔母さんに逢つて、この暮に入り用の金が、掛値のないところいくらか訊いて、それだけ工面してやろうじゃないか」

「いえ、そんなにまでされなくても——」

「そんなことで人一人——それもお前のような綺麗な娘の命を助

けられるなら、俺も本望というものだ」

「暮に要る金はたった五両、わけがあつて、私は知っております。手取り三十五両も入ったら、また博打ばくちの元手になることでしょう」
娘はやるせない姿でした。たった五両で死ぬ身が、我ながら疎ましかつたのでしよう。

「五両ぐらいなら何とかなるだろう、俺の叔母の家はツイそこだ、来てみるがいい」

「でも——」

渋る娘の手を取るように、ガラツ八は叔母の家へ向いました。

日頃ガラツ八の馬鹿馬鹿しさと純情さに打込んでゐる独り者の叔母は、五両ぐらいのことは、何とかしてくれそうに思えたのです。

二

それから三日目。

ガラツ八の八五郎は、銭形平次の家へ久し振りでやって来ました。

が、格子^{こうし}へ手を掛けて、

「ハッ」

と身を退^ひいたのも無理はありません。中から後光が射したように思つたのは、いつぞや両国橋で身投げを助けた娘が、平次と女房のお静に送られて、沓^{くつぬぎ}脱へ下り立つたところだったのです。

ガラツ八はあわてて飛退くと、庭木戸の蔭へ身を潜めました。

あの晩のロマンスは、さすがに打明けそびれて、平次にも言わずにおりますが、秘し隠しにしていたガラツ八の身分を搜り当てて、娘がわざわざ札に來たのでしよう。

こいつはいけねえ——、ガラツ八はそう言いながら、額から月さかやきて代を掌で撫であげました。

そのうちに、もう一度丁寧に挨拶をして、娘は帰って行く様子。真昼の光の下で見ると、少しふけて、二十一、二と踏めますが、みなり身装は思いの外リユウとして、その明るく愛あい嬌きよう作さった美しさも尋常ではありません。

「八、何を驚くんだ」

銭形平次は早くも見付けました。

「へエ——」

「女の子が怖いのか、戸袋の蔭なんかへ隠れて」

「怖いわけじゃありませんが、ヘッヘッ」

「いやな笑いようだな、まア入れ」

平次は吞込み兼ねた様子で八五郎を誘い入れました。美しい小春日が畳の上を這^はつて、今まで敷いていたらしい、薄い座蒲団^{ざぶとん}からユラユラと陽炎^{かげろう}が立ち昇ります。

「あの娘は何を言ったんで、——親分」

ガラッ八は頸^{くび}のところを搔きながら、膝小僧^{ひざこぞう}を揃えました。

「つまらねえ紛失物さ、——ところで、お前の方にも心当りがあ

りそうだ。一体あの娘をどこで口説いたんだ」

平次は何やら嗅ぎ付けた様子で、ニヤリニヤリと陣を布きます。

「口説いたわけじゃありませんよ、親分」

「じゃ口説かれた口かい、頼母たのもしいぜ、八」

「冗談で」

「早く白状しな、——俺は出て行かなきゃならない」

平次は少しも責め手を緩ゆるめません。

「笑っちゃいけませんよ、親分」

「笑やしないよ、子供の時から、俺は睨にらめつこの名人さ、可笑おかし

くたって笑わないから」

「弱ったなア、親分、からかっちゃ話が出来ねえ」

「贅ぜいたく沢な男だな、さア、言いねえ」

そんな事を言われながら、八五郎はどうとう三日前の晩の事を、
いちぶしじゅう
一伍一什話させられてしまいました。

「叔母さんから五両借りて、暮の凌しのぎにさせるつもりで渡すと、
娘はそれを握つて、一目散に駆け出しましたよ。身売りをせずに
済んで、どんなに喜んだか解りません」

ガラツ八はこう語りおわりました。

「そんな親切の籠こもった金を貰つて、娘は手前てまえの名も訊かなかった
のかい」

「へエ——」

「少し薄情だと思わなかったか」

「面喰らっていたんでしようよ、親分」

「仏様だな、手前は」

「でも、ここへ尋ね当てて来たじやありませんか、——叔母の家からでも訊いたんでしよう」

八五郎は娘の行動に理由付けるのに一生懸命でした。

「それが大笑いさ、あの娘は両国橋で助けて貰ったのは、八五郎兄^{あにい}哥とは夢にも知らねえ。まるつきり違った用事で、この平次を訪ねて来たのさ」

「へエ——」

「驚くなよ、八」

「……………」

八五郎はゴクリと固唾^{かたず}を吞みました。平次のニヤニヤした顔が、何をとんでもない事を言い出すか解らなかつたのです。

「あの娘は、鳥越^{とりごえ}の平助店^{へいすけだな}にいるお秋^{あき}という者だ、——叔父、叔母といつてるのは全く他人で、これは飴屋^{あめや}の丑松^{うしまつ}とお徳^{とく}という、仕事の相棒さ。いずれ良くない事で溜めたものらしいが、とにかく、三人で拵^{こしら}えた金が、驚いちゃいけないよ、八、二百九十
五両」

「フーム」

「三日前に五両一分入って、ちょうど三百両一分になった。三百両になったら、百両ずつ三人で分けるという約束だったが、その時ちようど肝腎^{かんじん}の飴屋の丑松が、木更津^{きさらづ}へ行つて留守、帰って

来たところで、三人立会いの上、隠した場所から取出したのは昨夜だ。封を切つてみると、中の三百両は綺麗になくなって、蛙も何にもいないという話さ」

「……………」

これを聞かされるガラツ八の鼻の穴の大きいこと。

「お秋は思案に余つてここへ飛んで来たのだよ、——どうせまともな商売で儲けた金ではないが、盗んだ金や掏^すつた金じゃない、三年越^{みとせ}し身を削る思いで溜めた三百両を、一人占めにされちゃかなわない。いずれ丑松かお徳の仕業に違いないから、何とかして取戻してくれ、とこういう頼みだ」

「……………」

「俺はお上から十手捕縄を預かる人間だ。世上の揉事もめごとや、慾得ずくの話なら乗出さないが、三百両は何といつても大金だ。盜賊の訴えがあれば捨てておくわけに行かねえ」

「……………」

「だがな、八、手前が身投げを助けて、五両で命を買った女が、ほんとう真ほんとう当にあの娘なら、話はなかなか洒落しやれているぜ。俺の代りに行つてみる気はないか」

「へエ——」

ガラツ八はつままれたような心持でした。が、娘の正体突き止めて、どんな顔をするか、見てやりたくないでもありません。

第一、紛失した三百両を捜し出して、あの娘の前へ積んでやる

のは、いつぞやの晩、五両一分二朱六十八文の金をやった時よりも、もつとよい心持になれそうな気がしたのです。

三

鳥越の平助店は、袋路地の別世界を形成した、総後架の前の四軒長屋でした。

路地の外に頑張つて、しばらく様子を見てみると、鉄砲^{てっぽうざる}を担いだ屑屋^{くずや}が一人、何にも言わずにノソノソと入って行きます。多分、この路地の中に住む店子^{たなこ}の一人でしょう。

「ちよいと、待ってくんな」

ガラツ八は呼止めました。

「へエ、へエ、何かお払いでも——」

四十年配の少し世の中を茶にしたような髯^{ひげ}面^{づら}が、それでも慇^{んげん}にガラツ八の前へ小腰を屈めました。

「払い物じゃねえ、ちよいと訊きたいことがある、そこの長屋の事だが——」

「へエ、私の家は左側の二軒目で」

「そんな事じゃない——とにかく、外へ出て一杯やりながら訊かうじゃないか」

「へエ——」

屑屋は自分の家へ箆^{ほう}を抛り込むと、黙って跟^ついて来ました。こ

んな事には慣れてる様子です。

町へ出ると、すぐ見付かった飲屋、縄なわのれん暖簾の中を覗いて、人の居ないのを見定めてから入ると、樽たるてんじん天神をきめ込んで、瞬く間に二本三本と倒します。

「さア、親分、訊いて下さい、何でも言いますぜ、ヘッヘッヘッ」
屑屋は酔いが廻ったらしく、胸をはだけて、可笑おかしくないのに卑屈な笑いようをしております。

「実は、あの路地の中に住んでいるお秋という娘のことだが——」
八五郎は四方あたりを見廻しながら小声で切出しました。

「ヘッ、ヘッ、ヘッ、——知ってますよ、親分も引つ掛けられた口でしょう。——枝ぶりの良い柳原の松ですかい、それとも両国

の橋の上で——」

「——？」

「土左衛門の真似はお秋がいかにかつば女河童でも時候じやないから、やはりブラ下がりの口かな」

屑屋はすっかり呑込んで、身振り入りで浮かれております。

「何だい、それは」

「知ってますよ、親分、——親が病気で身を売らなきやならない——とか、主人の金を五十両落つことした——とか、泣きながら、恐ろしく色っぽく持ちかけるでしょう。あれが術^てなんで、ヘッヘッヘッ」

「……………」

「こちとらがやったんじや、お笑い草だ。ブランコの足を引つ張られるか、川へ突き落されるのが関の山だが、——若くて綺麗な新造^{しんぞ}はトクだね、親分。十人が十人、有金引つ叩^{たた}かせられて、娘がいやがるのも構わず、ここまで送つて来る、——それから翌^{あく}日知らん顔をしてここへやつて来て、娘の身許を訊くとね、——筋書は大抵決つたものさ」

「……………」

「ね、親分、悪いことは言わねえ、黙つて帰んなさい、荒立てると恥を大きくするばかりだ。あのお秋という娘は、虫も殺さねえ顔をしているが、海千山千の、下っ腹に毛のねえエテ物さ。丑松は飴屋崩れの凄い男で、お徳はその上を行く塩っ辛い大年増だ。」

四つに組んでもトクのいく代物しろものじゃねえ。屑屋を渡世の俺でさえ、あの三人はよけて通ることになっているのさ」

「……………」

ガラツ八の八五郎も、正に一言もありません。身投げ渡世の女を救つて、五両一分二朱騙かたられたとは、さすがに言うわけにも行かなかつたのです。

「こいつは大笑いさ、——一杯飲まして頂くから言うんじゃねえが、あの路地を入れて、お秋の家を未練がましく覗こうものなら、やった金へ利子が付く、ヘツヘツ。あつしに逢つてからくりをみんな聞いたのが、親分の仕合せだぜ——」

屑屋の長広舌は、どこまで続くか解りません。

「俺はそんなじゃねえ、これを見るがいい」

ガラツ八はあまりの事に我慢がなりかねたものか、懷をくつろげて、チラリと十手の房を見せました。

「ヘエツ、親分さんは、お上の御用を承る方で——そいつは知らなかった、とんだ事を申しました、勘弁なすっておくんないまし。ところで、いよいよあの三人にも年貢の納め時が来たのですかい、親分さん」

屑屋は急にペコペコを始めました。

「いや、大金が紛失したと、娘が訴人して出たよ」

八五郎は、身投げの狂言に引っかけられた一人と思われたいばかりに、ついこんな事まで言ってしまったのです。

「へエ、あの娘がですかい、へエ、三年越しの身投げ狂言だから、三百や五百は持っていたかも知れません。——そいつは良い気味ですね、——もつとも泥棒は判っているようなものだが……」

「判っている？」

「長屋はたった四軒、右側の二軒は空^{あき}店で、お秋の家は左側の奥、私のうちの隣でさ、稼業柄思い切り汚^{きたなづく}造りな暮し向きだから、外から泥棒が入りっこはありません。金のあるのを知っているのは、相長屋のあつしと、あの三人だけでさ。泥棒はあつしでなきや、丑松がお徳で、こんな解り切ったことはないでしょう、親分さん、——^{はばか}憚りながらあつしには覚えがねえ。すると、やはり丑松がお徳」

この際限もない屑屋の話を、ガラツ八は神妙に聞いておりました。三百両の紛失は知らなかった様子ですから、泥棒はたぶん丑松かお徳でしょう。

その頃の三百両は、今（昭和十年頃）の三万円にも相当する大金で紛失の訴えがあれば、御用聞が一応調べてみるのも、当然のことでもあつたのです。

四

ガラツ八は屑屋に別れて、飴屋の丑松の家へやって来ました。

「御免よ、——丑松は居るかい」

荒い格子を覗くまでもなく中は見通しの二た間、形ばかりの古
 簞笥たんすがひと棹さお、葛籠つづらが一つ、割れた獅噛しがみ火鉢ひばち、芯の出た座蒲団
 など——見る影もない惨憺さんたんたる住居すまいです。

「誰だい、人を呼び捨てになんかしやがって、面つらを見せろ」

隅っこでとぐろを巻いていたらしい中年男は、襦袍どてらへ袖を通し
 て、起き上がりました。

「大層な勢いだな——少し調べるものがあつて来たよ、起きて貰
 おうか」

「へエ——」

目ざとく十手の突つ張つた懐中ふとこを見ると、丑松は弾き上げら
 れたように飛起きました。上役人だけは、極度に恐れるように習

慣づけられた人種だったのです。

「紛失物があつたそうじゃないか、どこにその金が置いてあつたんだ」

ガラツハは精一杯の威儀を作りました。

「へエ、恐れ入ります、——御苦勞様で、へエ」

「そんな事はどうでもいい、俺の言うことに返事だけしてくれ」

「へエ、相済みません。——金は三百両、瓶かめに入れて封をして、お勝手の落しの中に置きました」

「奪とられたのは」

「三日の間でございます。三日前にお秋が持つて来た五兩一分二朱と六十八文のうち、二朱と六十八文は当座の小遣とりのに取除け、五

両一分を足して、ちょうど三百両と一分になったのを、封印をして落しに入れたまま、あつしは木更津へ参りました」

「何の用事で行ったんだ？」

「儲け口でございますよ、親分さん、——が、当てごとは向うから外れて、ボンヤリ帰って来たのは昨夜、ゆうべここで三百両を三つに分けるつもりで瓶の蓋を開けると、中は空っぽじゃありませんか」

「……………」

「盗ったのはあつしとお徳とお秋のうち、それに違いありませんが、あつしは木更津へ行つて昨夜帰ったばかり、お秋は自分で稼いだも同様の金ですから、取るはずもなし」

「すると、お徳が怪しいと言うのか」

「そんなつもりで申したのじゃございません。近所だつて、正直者ばかり住んでいるわけじゃありませんから、ヘエ——」

「そのお徳はお前の女房じゃないのか」

「世間じゃそう思い込んでおります。もつとも、お徳もそのつもりでいるようで、ヘッヘッヘッ、焼餅ばかり焼いてしうがありません」

不思議な道徳を持った人達、ガラツ八は呑込み兼ねて顎あごを長くしております。

「女二人はどこへ行つたんだ」

「お徳はお神籤みくじを引きに行きましたよ。お秋は大方番所へでもお願いに行つたんでしよう、親分さんが来て下すつたところをみる

と」

「お前は自棄やけになつて、朝つから飲んでいたのかい」

「へエ——」

これはガラツ八の探偵眼にもよく解ります。茹蛸ゆでだこのように真

っ赤になつて、熟柿臭じゅくしくさい息をフウフウ吐いている丑松だったの

です。

「その落しと、瓶を見せて貰おうか」

「へエ——」

案内されたのはお勝手、かなり重い土竈へつついをどけて、揚げ板を

剥はぐと、中は三尺四方ぐらいの穴になつております。隙洩すきもる光線

で一面の埃ほこりは見えますが、瓶も何にもあるわけではありません。

「瓶は？」

「こちらに出してあります」

流しの前に据えたのは、一升入りほどの塩瓶、蓋も封印もケシ飛んで、浅ましく空っぽの中を、天窓から落ちる微光にさらしております。

「お前さん、お神籤は大吉だよ、人の気も知らないで、本当に」
ブリブリしながら帰って来たのは、丑松の女房のつもりでいるらしいお徳です。三十前後、醤油で煮〆《にしめ》たような大年増ですが、どこか気の強そうなところがあつて、丑松を取って押える貫禄は充分です。

「大吉は吉に変わるというぜ」

「だって癪^{しゃく}じゃないか、四文払って、大凶の籤^{くじ}なんか引かされて」
お徳はお勝手口からヌツと入ると、出合頭、ガラツ八と鉢合せをするほど近々と対面してしまいました。

「お上の御用を聞いていらつしやる親分さんだよ」
と丑松。

「おや？」

お徳は面喰らって、しばらくは挨拶も忘れた様子です。

「三日の間、この家を明けたことはないのかえ」

ガラツ八は平次譲りの事務的な調子で、その驚いたところを突っ込みました。

「私は飴を売るのが商売だし、お秋さんは他に稼業があるし、夜

も昼も家を明け通しですよ」

「お前か、お秋が、一人で留守をしたこともあるだろう」

「今までだってありますよ」

「近所の者が忍び込んでも、知らずにいるわけだね。ここは一番の奥だから？」

「近所だって、お向うは二軒とも明いているし、物騒なのは隣の
 屑屋より外にやありやしません。清吉せいきちといってね、人間は馬鹿
 気ているが、兇状持ですよ」

「何の兇状持だ」

「畑荒らしの、——本人が自慢で言うんだから嘘じやありません。
 沼津ぬまづ在に居る時、西瓜畑すいかを荒らして、それが表沙汰になって三十

叩かれて追放された——って。もっとも丁寧に勘定したら、二十七しか叩かなかった、お上にもお情けはあるんですってね、親分さん」

どうもこの女から筋の立った話を訊き出すのは、容易の業ではありません。

しばらく待ちましたがお秋は帰らず、ガラツ八は物足りないような安心したような心持で引揚げました。引揚げる前に、簞笥や葛籠や、押入や天井裏や、一応家の中を見たことは言うまでもありません。

五

「親分、大変ッ」

ガラッ八が飛込んで来たのは、翌^{あく}る日の朝でした。

「何が大変なんだ、——虫持じや付き合い切れないぜ、毎日一度ずつ、その『大変』の振出しを吞まされちや」

平次は房楊枝^{ふさようじ}を井戸端の柱に植えて、手水鉢^{ちようずばち}に水をくみ入れながら、こう振返りました。

「あの女が殺されましたぜ、親分」

「どの女だ」

「飴屋のお徳が、今朝ドブ板の上へ四つん這^ばいになっていたのを、屑屋の清吉が見付けたんで」

「そいつは大変だ」

平次は大急ぎで顔を洗うと、着換えもそこそこ、鳥越の平助長屋へ飛びました。

「寄るな寄るな、下手に顔を出すと、掛り合いだぞ」

町役人と番太が、警戒の声を洩^からしている中へ、平次と八五郎は息せき切つて駆け付けたのです。

「あッ、銭形の親分さん、ちようどいいところへ、八五郎親分さんも御一緒に——」

平次はそれを掻き分けるように、長屋の裏へ廻りました。

「あッ」

物馴れた眼にも、その惨憺たる有様にたじろぎます。お徳は後

ろから頸筋くびすじを深々と切られて、半分開けたドブ板に手を掛けたまま、碧血へきけつの中に崩折くずおれていたのです。

刃物はよく切れそうな菜切庖丁が一挺、これでやりましたと言わぬばかりに、死体の側に。

「これはどこのだ」

平次は取上げました。

「へエ、——私の家あつしので、世帯を畳む人の払い物の中から、使えそうなのを残しておいたんで」

屑屋の清吉は神妙そうに顔を出しました。

「どこに置いてあつた」

「お勝手でございますよ、親分さん。でも、戸締りなんかしたこ

とがありませんから、案内知ったものなら、ちよつと戸をすかしただけで、わけもなく棚から取れます」

清吉は一生懸命の弁解でした。

「この死体の恰好は面白いだろう、八。ドブ板を剥^はがそうとして、手を掛けたところを、後ろからやられた形だ、——お徳が金をここへ隠しておいて、取出そうとしたところをやられたか、それとも——」

平次はその後はいませんでした。

その声を聞いて、家の中から出て来たのは丑松とお秋です。

「銭形の親分さん、とんだことになりました。とうとうこんな事になつて」

おろおろするお秋。

「気の毒だが、金は容易に戻るまいよ、——下手人を捜すのはわけもないが」

「親分さん」

「もつとも、三百両と一分のうち、五両一分の施主はここに居るが、本人は思いの外諦めてあきらんでいるぜ」

「まあ——」

振り返ったお秋、ガラツ八と顔を合せて、さすがに仰天しました。たった四日前の一番甘かった施主、この長い顔の持主は忘れようとして忘られるはずありません。

ガラツ八はしかし、この娘をとがめる気にはなりませんでした。

身投げや頸吊りの狂言までして、三百両の大金を稼ぎ溜めた女にしては、何という清純な美しさでしょう。

打続く激動と疲労に、少し蒼くはなっておりますが、歌舞伎役者のように整った身体、古い衾あわせがピタリと身に付いて、乱れた毛もたしなみを失うほどではなく、激情的に赤い唇も、深い悲しみを湛たえた黒い瞳も、ガラツ八の眼には、言いようもなく美しく悩ましく見えるお秋だったのです。

金はどこを探しても見付かりません。ドブ板の乱れ工合から見ると、たぶん三百両を隠したお徳が、人知れずそれを取り出そうとして、それを覗うかがっていた曲者にやられたのでしょう。

丑松はその晩も留守、これは自棄やけの小博奕こばくちに夜明しをしたと解

つて——途中で拔出して、お徳を殺す時間があつたかも知れないにしても、一応は疑いの外に置かれ、隣家の屑屋清吉は、一番不利な立場に陥つて、とうとう平次に引立てられてしまいました。

「俺じゃねえ、俺はそんな人間じゃねえ。正直屑屋の清吉といや、浅草中で知らない者のない俺だ」

番所へ伴^つれて行かれても、清吉は必死と抗弁を続けます。

「畑荒らしの兇状持だと言うじゃないか」

「とんでもねえ、田舎^{いなか}の若い者が、西瓜の一つや二つ盗^とったところで、いちいちお上沙汰になつてたまるものか。あれは見栄を張つて、チヨイと言つてみただけの話さ。丑松の野郎は喧嘩兇状と、博奕兇状と二つも持っているというから、負けているのが癪にさ

わったんだ」

この調子ですから、平次も手の付けようがありません。

「親分、屑屋の火鉢の中から、小判で三両出て来ましたぜ」
ガラツ八が飛んで来ました。

「どれ、見せろ、——なるほど、吹き立ての小判が三枚だ、これはどこから出した」

「国を出る時から、万一の用意に持っているんだ。お袋の形見だ」と清吉。

「嘘をつけ、あとの二百九十七両はどこへやった」

「知らねえ知らねえ、そんな事を知るものか」

「いや、知らないとは言わさない、——昨夜だって、三間とは離

れないお勝手から庖丁を持出されて、ドブ板の上で人殺しのあつたのを知らなかつたはずはない」

平次は容赦ようしゃもなくグングンと突っ込んで行きました。

「自慢じゃねえが、俺は一杯飲んで寝ると、死んだも同様だ——
飲まない晩の事なら、そのかわり何でも知っている。飴屋の丑松
の野郎が、木更津へ行つたと言ひ触らして、賭場とばで夜を更かして
帰つちや、お秋を誘ひ出したことまで——」

「待て待て、それは本当か清吉」

「本当も嘘もねえ。丑松を締め上げるなり、賭場を洗つてみるなり、行つたという木更津を調べりや解ることだ。あの野郎は浅草切つての悪党だが、押かけ女房のお徳がその上を越す悪党で、丑

松も女房の悪党振りが気味が悪くなつたんだよ。それに、間がな
 隙すきがな、綺麗なお秋を付け廻して、口説くどき落そうとしていたんだ。
 第一お秋の稼うぎというものは容易じゃねえ。柳原土手と両国の橋
 の上で、この二三年の間に三百両——いや四百両か五百両も稼い
 でいる」

清吉の言葉には真実性があります。

「八、行つてみようか」

「二人突き合せて叩かせると、お互に埃ほこりの出ようが違やしません
 か」

「その事だ」

平次はガラツ八に清吉を預けて、鳥越の長屋へ飛んで帰りまし

た。お徳の死体は一応家の中へ入れて、丑松はその前で茶碗酒を
 呷あおっています。

六

清吉の家の中から、三両、五両と順々に小判小粒が発見されま
 した。壁の破れ目、畳の中、土竈の下と、およそ人の気の付かな
 いところから、二日の間に捜し出したのは、メ《しめ》て十八両、
 あとの二百八十二両はどこへ隠したか解らず、清吉もまた、頑と
 してお徳殺しを白状しません。

「金はある朝、死骸を見付けた時、側に落ち散っていたんだ。――

「出来心で隠したが、お徳を殺したのは、俺じゃねえ」と言い張るのです。

丑松は素直に、お秋を付け廻したことも、木更津へ行つたことにして、お徳の鋭鋒^{えいほう}を避け、実はお秋を誘い出しにかかったことも白状しましたが、お徳を殺したことはどうしても言わず、それに証拠は一つもありません。

丑松を一応帰して、お徳の葬い^{とむら}をすませ、改めて呼出そうとすると、今度は、お秋が行方不明になつた事がわかりました。

「しまったッ。お葬いが済んだらすぐあの娘を呼出そうと思つて来たのに、——あの娘は下手人か、でなければ何もかも知つていたに違いない」

平次は口惜くやしがりますが、広い江戸、姿を変えてどこかへ潜り込めば、容易のことでは見付かりません。

「あの娘が三百両を盗んで、お徳を殺したのでしょうか、親分」
ガラツ八は少し平らかでない様子でした。

「身投げの狂言で、三百両も稼いだ娘だ。顔は綺麗でも、あまり信用は出来ないよ」

「そんな事はありませんよ、身投げの狂言は、芝居気さえあれば出来ます。泥棒や人殺しは、あの娘に出来る芸当じゃない」

ガラツ八は妙にやつきになります。

「まあいい、俺には俺の考えがある、——世間の評判でもわかる通り、悪かったのはあのお徳さ。いやがるお秋に、あんな仕事を

さしていたんだというから」

「ね、その通りでしょう、親分」

「だが、あの日の朝、お秋の着物にドブ泥の付いていたことに気が付かなかったかい」

平次はそんな事まで見ていたのです。

「お徳の死骸を見て、びっくりして抱き上げたんですもの、溝^{どぶど}泥^ろも血も付きますよ」

「もういい、——今日は少し変だぜ、八」

平次は苦笑いして、銚^{ほこ}を納めました。

「でも、これだけは聞いて下さい、親分。お秋は丑松を嫌ってはいるが、捨児^{すてご}を拾って育てられた恩があるから、蔭じや丑松を庇^{かば}

っていますぜ。お徳はこの三年ばかり前に顔を出した女で、お秋に身投げの狂言を仕込み、丑松を抱きこんで嫌がるのを無理にやせた女だ。お秋とは人柄が違いますよ」

ガラツ八は日頃に似にげ気なく調べが届きます。

「よく聞き込んだね、八」

「それほどありませんよ」

「とにかく、お徳の殺されたのはあけがた暁方だ。その時刻に、丑松が

どこに居たか、もう一度突っ込んでみるとしよう。それからお秋

の行方ゆくえは江戸中に網を張って捜さなきやなるまい。あの娘が下手

人でも、下手人でなくとも——」

「……………」

あとの一句が、八五郎には気に入らない様子でした。

「それから、二百八十二両はどこへ誰が隠したか、——金を持っている奴が、十中八九下手人に決っている」

平次はしばらく息を抜いて、誰が金を使い出すか、それを見てやろうとしている様子でした。

七

その頃から、浅草、下谷^{したや}、日本橋、本所へかけて、不思議な届出が続出しました。金額は定^きまりませんが、多いのは二十両三十両、少ないのは一分二分、現金を紙に包んで、窓からお勝手口か

ら、雨戸の隙間から、そつと投り込んで行くものがあつたのです。^{ほう}

金額を調べてみると、遠くて一二年前、近くはツイ一二ヶ月前、柳原の土手か、両国橋で、自殺しようとしている娘を救い、その気の毒な事情に同情して、乞われるままにくれてやった金と、細かい端数までピタリと合っているではありませんか。^{はすう}

「八、お秋は金を返し始めたよ、——四五日前からやっているよ。うだが、掛り合いが面倒だから、最初のうちは誰も届出なかったんだ、——今になってみると、金を盗ったのは、やはりあの娘だつたんだね」

「盗つたり返したり、おかしいじゃありませんか」
腑に落ちないのは八五郎ばかりじゃありません。^ふ

「とにかく、柳原の叔母さんの家へ行つて五両の金が返つたかどうか訊いてくれ、多分いの一番に返したと思うが」

「……………」

「それから、これは大事なことだが、金を返した日と時刻とを訊いて来るんだよ」

「へエ」

八五郎は飛んで出ました。

それから半刻はんとぎ（一時間）ばかり。

「親分、変な事になりましたぜ」

旋風つむじのように飛んで歸つたのです。

「何が変なんだ、八」

と平次。

「金は確かに叔母のところに返してありましたよ。懐紙ふところがみに包

んで、小判で五両、——ところが、窓から金を投り込まれたのは、お徳の殺された晩で、しかも叔母がたった一人で晩飯の後片付けをしている時だというから、戌刻いっつ（八時）より遅くはありません」

「何だと？ 八」

「金はお徳が殺される前——その晩の宵のうちに叔母のところへ返されたんですぜ。親分、これは一体、どういうわけでしょう」
ガラツ八の疑いは平次の疑いでした。

「待ってくれ、——最初金が無くなつて、俺のところへ来たのはお秋だ、——その後でドブ板の下からお徳の隠した金を見付けた

のかな、——すると、お徳を殺したのは誰だ」

二人は顔を見合せました。が、驚きはそれには止まりません。

「ちよいと、——お話中ですが、今こんな物をお勝手へ投り込んで行った人がありますよ。すぐ追っ掛けましたが、姿は見えません」

お静が差出したのは、帛紗ふくさに包んだ、持重りのする品、解く手も遅しと、引っくり返すと、中から出たのは、五六十枚の小判と、二三枚の手紙ではありませんか。

「何だ何だ」

手紙の文句はしどろもどろで、文字は乱れがちでしたが、判読すると、

お徳さんは私をおどかして、あのいやな仕事を続けさせました。三百両になったら、それを三つに分けて止よすはずでしたが、どうしても許してくれません。私はせめて自分の取り前の百両だけでも、御迷惑をおかけした方へ返して上げようと思いましたが、お徳さんはいざという時になって、三百両みんな隠してしまつたのです。

平次親分にお願いしたのは、その金を見付けて頂いて、足を洗いたかったからですが、お徳さんはそれを察して、どこまでもこの仕事をつづけろと、いろいろ脅かしました。いやだと言ひ張つたら、私は殺されたかも知れません。

そのうち三百両の金は裏のドブ板の下に隠してあることが解ったので、お徳さんが酔って寝込んだのを幸い、そつと取出し、鳥越様の石垣の穴に隠して、その晩から迷惑をかけた方へ返し始めました。柳原の八五郎親分の叔母さんへは、一番先にお返し申しました。

五六軒歩いて夜半よなかに帰つて来ると、私は何にも知らずに寝込んでしまいました。その後、暁あけがた方になってお徳さんが外へ出、ドブ板の下を調べて、金のなくなつたのに驚いてるところを、後ろから刺されたのでしよう。私の取出した金は二百七八十両ですから、まだ少しは残っていたはずです。私はこのお金をみんな返してしまうまでは、縛られても、殺されてもいけないと

思いました。その上、親方（丑松）はいやな事ばかり言うので、とうとう家出をして、三日の間に、知っているだけはみな返しました。あとに残ったのは五十三両、これは旅人から頂いたので、お家も、お名前も判らない口です。どうぞ、困っている人達にでも上げて下さい。

私はもう、するだけの事をしてしまいました。

恥かしい身体を、皆様のお目に曝さらすのは我慢が出来ません。今度こそ本当に身を投げて死んでしまいます。

いろいろ御恩になりました。草葉の蔭から、末永く御礼を申し上げます。

あき

平次親分さま

八五郎親分さま

「わッ、とうとう死んじまいやがった」

八五郎はフラフラと立上がりましたが、どこへ行く当てもなく、どつかと坐りました。

「いや、まだ死なない、——身投げは昼じや出来ない」

平次は落着いております。

「でも飛込む場所が判らない」

「いや、俺にはよく判っている」

「助けてやって下さい、親分、身投げの狂言は悪いが、あの娘は

根が正直者だ」

「解つてるよ、それより先に、お徳殺しの下手人を挙げよう」

「誰なんで」

「お秋が庇^{かば}つたのは、育ての恩のある丑松だ。下手人は清吉でなきや、庖丁の切れ味を知っているお秋か丑松だ。清吉は十八両の金を盗んだだけ、お秋はその晩もう金を返して歩いている。残るのは丑松だ。——多分こうだろうと思うよ、暁方になって丑松は賭場から拔出して来ると、お徳がドブ板の下で金を探してるのを見付けたんだろう。フラフラと邪魔者を殺して三百両せしめる氣になった。が、殺しただけで、金を取る前に清吉に見付けられ、驚いて隠れたに違いあるまい。俺は最初お秋を疑ったんで丑松を

厳しく調べなかったが、今度は逃しつこはない」

平次とガラツ八は飛んで行つて丑松を挙げました。頑強に口を緘つぐみましたが、後から後からと見付けた証拠を突き付けて、とうとう口を開かせたのは宵の口。

「親分、暗くなりましたぜ」

ガラツ八は気が気じゃありません。

「今からでちょうどいいよ」

二人はそのまま両国へ向いました。

「お秋はここへ来るに違いない。お前は西にいるがいい、俺は東の方に頑張る」

平次は橋を渡つて向うの方へ行きました。

＊

それから一刻^{いつとき}あまり、橋の上の往来の全く絶えた頃、浜町の方から、月下の橋へ急ぎ足に差しかった娘があります。

真つ直ぐに延びた身体、正面を向いた顔、何の憂愁もない事務的な足どり、あまりの平静さに、ガラツ八は危うく見落すところでしたが、橋の欄干へ寄つて、何の思い入れもなく、あわや身を躍らしそうになったのを見て、ガラツ八は死物狂いに駆け寄りました。

「待った、——待つてくれ、死ぬには及ばねえ」

「まあ、八五郎親分」

狂言とは、何という違いでしょう。娘の身体を引寄せて、犇^{ひし}と押付けながら、胴ぶるいをしていたのは、何とガラツ八自身の方ではありませんか。

お秋は八五郎の腕の中に任せ切つて、もがきもどうもしませんでした。悲しく挙げた顔は塑像^{そぞう}のように硬張^{こわば}つて、蒼白い頬は涙の痕^{あと}もなく乾き切つておりました。これは満足しきった人の顔です。しかも、この世の人とも思えぬ美しい顔だったのです。

平次はそれを、遠くの方から黙つて見ておりました。何という不思議な情景であつたでしょう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（九）不死の霊薬」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第八卷」中央公論社

1939（昭和14）年6月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1936（昭和11）年12月号

入力：山口瑠美

校正：結城宏

2017年8月25日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

身投げする女

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>